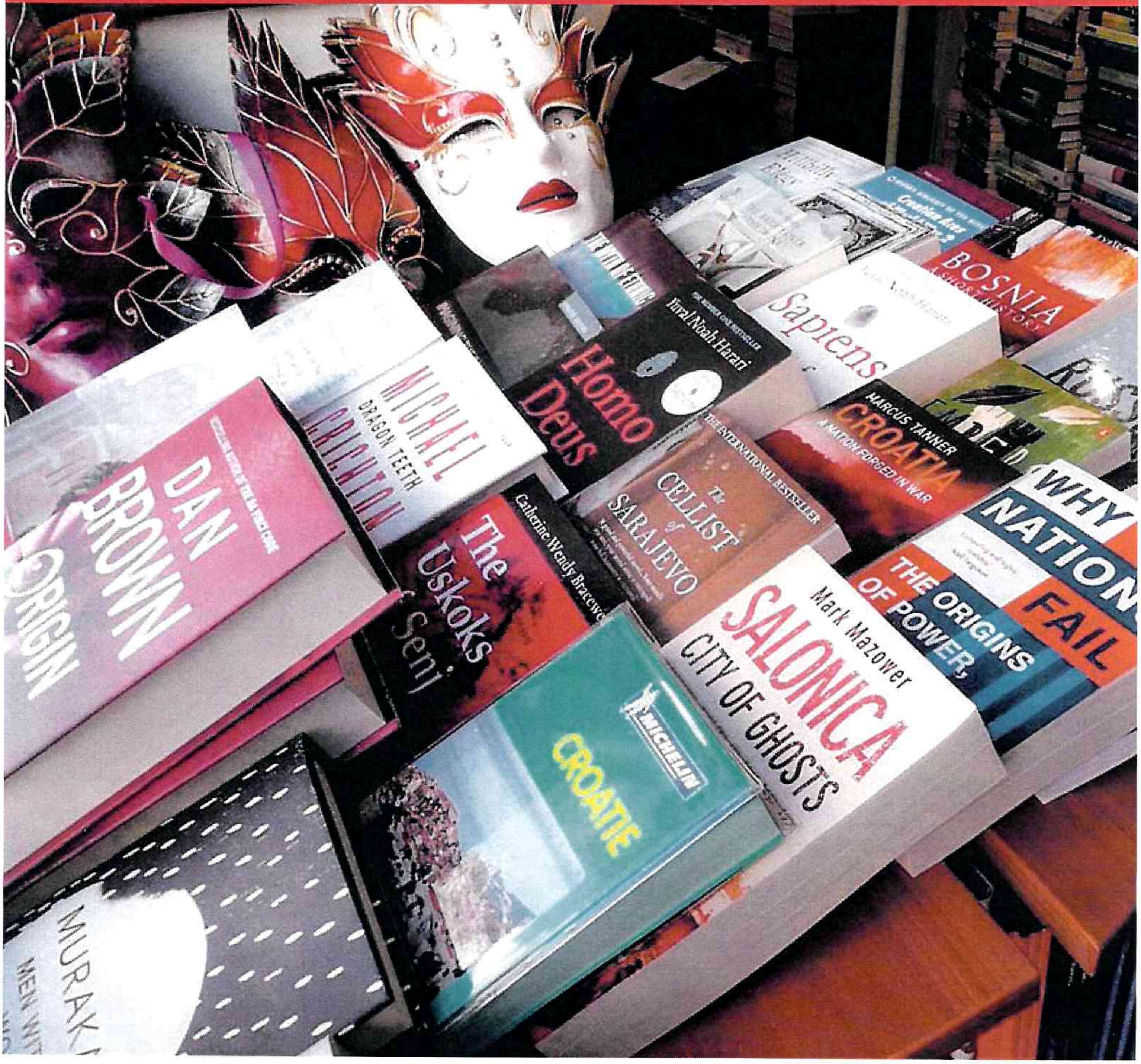
ISSN 0914-3157

ほんのしるべ

書標

2021.
3月号

2021年3月5日発行（毎月1回5日発行）
通巻507号 昭和61年7月15日第三種郵便物認可



世界の本屋さん vol.110

クロアチア・ドブロブニク アルゲブラ書店

ノセ事務所　能勢　仁

ドブロブニクはクロアチア共和国の最南端にある世界遺産の都市で、本土とは陸続きではなく、飛び地になっている。アドリア海の真珠といわれる超観光都市である。旧市街は城壁内にある閉鎖市街であった。観光船が着くとバス四十台分の人が街に送りこまれる。道路はバスの一時停車、観光客放出、すぐに発車が繰り返されていた。

城内にあるアルゲブラ書店は商店街の中の一商店である。城内には多くの人が暮らしているので、生活感が息づいている。コンビニ、クリーニング店などもあり、野菜や食品マーケットも城内中心にある。歩いている人は観光客ばかりである。生活感横溢の観光地とは珍しい。アルゲブラ書店の店内のカメラお断りポスターは直ぐ分った。小生は身分を明かしたので撮影OKであった。女性店主の地場書店である。

公用語はクロアチア語なのだが、英語がよく通じる国なので、店内の注意書き、説明はすべて英語であった。顧客は地元生活者よりも外来者が中心であろう。店（約三十坪）の右四分の一は土産物、絵葉書であった。この店の品揃えは地元の人にも観光客にも喜んでもらえる商品幅といってよい。歴史、地図ガイド、芸術、文学、ペーパーバックス、こどもの本（少々）、国際話題書といった所であった。仮面の陳列・販売は地元祭りのためだろうか。好印象の店であった。

（表紙題字・陳舜臣）

「書標」歳時記　3月

わたしは、三月の一日に拝観に行って、おひなさんのごちそうを見せていただいた。本堂には、有職雛やら立雛やら、幾体ものおひなさんがおまつりしてあるので、蒔絵のお膳やお重（重箱）が供えてある。それは、ひなのごちそうらしく、かわいらしいものばっかりで、さぞかしお手間入りのことやろう。

大村しげ著『静かな京』（講談社）より

もくじ

世界の本屋さん110
「書標」歳時記〈3月〉　1
著書を語る586　「『国境なき技師団 スマトラ島から東北へ』に寄せて」　小長井　一男　2
書標・書評　『二番目の悪者』ほか　4
特集　「生まれてこないほうがよかった」という思想　6
ひとりを愉しむ　10
今月のおすすめ
社会科学　16　コンピュータ　18
自然科学　19　医学書　20
人文科学　21　文学・文芸　22
文庫・新書　23　芸術　24
実用書　25　地図・旅行書　25
語学・辞典　26　児童書　27
読者から　28
インフォメーション　30
本屋うらばなし「バトン」

※表示価格はすべて税込み価格です。

「『国境なき技師団　スマトラ島から東北へ』に寄せて」

小長井　一男

災害の報道は痛ましい被災の現実を容赦なく茶の間に持ち込む。その報道も、そして私たちも、やがてその騒ぎが嘘だったかのように日常を取り戻していく。ギリシャ神話の黄泉の国で、その水を飲むとすべてを忘れてしまう忘却の川レーテ（Ｌｅｔｈｅ）。私たちは、意図しようとすまいとレーテの水を飲みこむのだろう。忘却は人間のネガティブな一面と受け止められがちだが、あるいは人がポジティブに生きていくための〝心の安全装置〟なのかもしれない。私たち自然災害に関わる者は、忘却という人間の本性にあらがってつらい災害の記憶と復興の課題に関わり、これを風化させずに次の世代に伝えていく宿命を担っているのだと思う。

若い頃の自分の地震被害調査も災害報道そっくりだった。報道陣に負けぬ勢いで現地に赴き、急いで報告書を仕上げることに集中していた。地震の痕跡が消えないうちにという焦りがあった。大地震の後、被災地の地形が、いやそればかりでなく社会のありようが変化し、復興が思わぬ長期にわたり、その効果も当初の目論見から変貌していくことは連綿と繰り返されてきた。一八五八年（安政五年）の飛越（ひえつ）地震では立山連峰の鳶山（とんびやま）が崩壊、およそ四億立方メートルと推定される土砂が立山カルデラを埋めた。常願寺川では河道閉塞が発生し、それが余震や雨で決壊。下流部は濁流に飲まれた。そして地震から一六〇年が経過した今も年間約五十億円の砂防対策費が計上されている。少なくとも土木工学を専門とする私たちは忘れてはならない話だが、やはり若い頃の自分は災害直後のすさまじい状況にのみ心が奪われていたのだと反省する。

国境なき技師団の立ち上げの少し前、土木学会次期会長だった濱田政則氏、そして飛島建設インドネシア事務所の鈴木智治氏から技師団の構想を伺い、目からうろこが落ちる思いだった。本来の、そして恐らく太古から続く土木技術者の使命に立ち返る構想だった。比較するのははばかられるが、奈良時代の高僧、行基の事績を思い出す。当時、僧尼令といって、仏教の民衆への直接の布教活動が固く禁じられていた中で、その禁を破り、畿内を中心に困窮者のための布施屋九所、道場や寺院四十九院、溜池十五、溝と堀九筋、架橋六所等の社会事業を成し遂げていった。行基の土木技術は、その師である道昭譲りとされる。道昭は六五三年に遣唐使として入唐し、「西遊記」の実在のモデルである三蔵法師玄奘から大乗仏教の利他行（りたぎょう）を学んだ。貧富貴賤を問わず人のために尽くすことを仏の道とする利他行を実践す

る方便として土木技術があったのだろう。当時の仏教寺院は、祈りの道場というだけでなく、土木、医学、薬学、天文学など最先端の科学技術とセットの総合大学であったように思う。幾多の人々の生涯を見守る中で見いだした人の心の安寧への真理を、最先端の科学技術を方便として具現化する道場であり、だからこそ国の大きな財政支援もあり、またそこに遣唐使の役割もあったと思う。

今の高等教育の道場である大学に長年勤めていた自分の経験を振り返ってみると、予算も潤沢でなく、科学・技術が細分化し、必然的に忙しいカリキュラムに追われる日常だった。経産省によれば、私が大学を退職する前年の二〇一七年で、欧米やアジアの主要国の研究開発費の中に占める政府負担割合は二割を超えているのに、日本はわずかに一五・四一％。教員も学生も忙しく、宗教や哲学の語るところを深く思索し、語り合うような時間はなかったと思う。行基が生きていたら、今の大学のありさまや、学術会議と官邸のぎくしゃくした関係をどんな思いで見るだろう。

国境なき技師団は予算規模も小さく、長期にわたり継続しなければいけない目配りも時に思うに任せない。立ち上げ当初は、予算獲得に奔走し、慣れない支援事業を進める中で、正直なところ失笑ものの失敗も少なくなかった。行基の事績には到底及ばない。それでもみんな矜持を胸に抱いてきた。本書のあとがきで鈴木智治氏の長女、鈴木乃理子さんは「父の言う『ヒューマニズム』は多弁ではありません。傷ついた人をいたわる。できればいつまでもいたわる。人として当たり前の道を歩むといっているにすぎないのだと私は受け止めています」と書かれている。そんな思いが私たちを支えていた。ありがたいことに多くの人たちに支えられた。そして今に至るまで若い学生たちが自発的に防災教育に関わっている。

本書は、この小さなＮＰＯの活動にぎこちなくも関わってきた著者たちの失敗と、そして少しばかりのささやかな成功の記録である。こうした自発的な試みがこれまでなされてきたこと、今後も続いていくであろうことを多くの人に知ってほしい。そして、創設以来、インドネシアを中心に私たちの活動を支え、本書の上梓を目前に天国に旅立たれた鈴木智治氏の霊前にも、私たちの決意をつづった一冊として本書を供えたいのである。

『国境なき技師団
スマトラ島から東北へ』
早稲田大学出版部・990円